

独歩研究小論 (一)

―シンセリティーをめぐつて―

鈴村藤二

一、序

日記以前の独歩

第一の日記

一序論

「欺かざるの記」

二、シンセリティー

「欺かざるの記」の特殊語

シンセリティー

の意味

シンセリティー体験

シン

セリティー感情

インスピレーション

三、自由と驚異

習慣の束縛

自由の意味

驚異とシンセリティー

四、独歩とイギリス浪漫派の關係

シンセリティー

幽音悲調

瀬戸内海

での体験記録

淳朴の生活

人生の経

過

五、結語

明治の初年に生まれ、新しい高等教育を受けた青年が人生の指標に迷つたり、宇宙や人生の問題で懷疑と煩悶を重ねた例は他にもあるが、国木田独歩のように自己を深く見つめて、その迷いや苦しみを、又はその感情や信仰を忠実な記録に遺している場合は稀である。その日記「欺かざるの記」は独歩の懺悔録ともいうべく、二十三歳から二十七歳までの四年間の彼の内面的生活を如実に物語っている。それはちやうど明治二十六年から三十年までのことであつた。

この日記に示されているのは、政治と文学と宗教との間にさまよい、又は恋愛の苦しみと生の悩みに虐げられる姿であつたが、それはちやうど同じ頃の透谷や藤村等にも通ずる明治のキリスト教青年の一つの典型でもあつ

た。独歩の文学作品は、この「欺かざるの記」のすぐあとに接続し、而もその作品の多くは、既に何らかの形で、この日記の中に記されている。つまり、この日記を書きやめた時から、彼の本格的な創作活動が始まるのだから、独歩は「欺かざるの記」で記したことを、こんどは、別の形で表現したことになる。だから独歩の文学精神がどのようなものであり、それはまたどのように文学作品に昇華しているか等のことを少しでも明らかにしようとする為には、まず「欺かざるの記」に再検討を加えることが必要でもあり、又妥当な順序でもあらう。

私はその順序に入る前に、この日記の書かれた時代、その頃の独歩の身辺の事情等について簡単に説明しておくことが、今後筆を進めて行く上にも便宜であらうと思ふ。

独歩は「欺かざるの記」の前に、短期間ではあるが、もう一つの日記を書いている。それは明治二十四年（二十一歳）の元旦から、七月三十一日までである。それから約一年半の間日記は中断され、二十六年二月三日から第二の日記「欺かざるの記」が書き起こされ、三十年五月十八日で終っている。然しその終りの方には、一ヶ月二ヶ月にわたる記事の断絶がある。そのころ「源をち」

や「独歩吟」を世に送っており、記事の断絶はそのためであらうかと思われる。

明治二十四年の元旦から、どうして日記を書く気持になつたのか明白ではないが、この頃から自己を見ようとする意識が動いてきたということだけは言い得る。

独歩が日記をはじめた明治二十四、五年がどんな時代であつたかは、ここで多言を弄する必要はあるまい。わが國の社会は一応の安定を示し、立憲政治も危い足りではあつたが、第一の日記の書き始められる前に既に発足している。文壇においては硯友社の全盛期であり、新しい学校教育を受けた人達の文学が美しく花を咲かせ、明治文学の一頂点をなした時期であつた。従つてこの頃の知識青年層が政治と文学とに強い関心をもつたのも当然のことであらう。

独歩の出生に關しては多少の疑問を残しているが、ともかく明治四年七月、千葉県の銚子に生まれた。七年、四歳の時東京に出で、九年には、山口県岩国裁判所に奉職する父に伴なわれ岩国に移つた。明治十八年山口中学に入学したが、中途退学して十九年上京、二十一年五月、東京専門学校（現慶応義塾）の英語普通科に入学した。然しその翌二十二年九月、英語政治科に再入学している。

この頃彼はキリスト教の教会に通うようになった。これがその後の独歩のものの見方、感じ方に重大な影響を与えたと思われるが、どういふ動機でいつ入信したのか明らかでない。

明治二十四年一月元旦、第一の日記が起筆せられた時、独歩は数え年二十一歳になつて、東京専門学校の政治科に在学していた。

一月四日の日曜日、彼は教会で洗礼を受けている。この月の十八日は青年文学会の発起人会を幹旋し、この時彼のおき助言者であつた徳富蘇峯と相知つた。又その夜は、専門学校内の基督教青年懇親会の幹事役をつとめた。いかゞ独歩が当時活動的であつたかを物語つている。そのため、彼は功名を銜う輩と見られ、親友水谷直熊から「君を誤る者は夫れ只『名』なる哉」と忠告せられてゐる。

二十四年二月、鳩山和夫校長を排斥し、ストライキを執行したが、それが因をなし三月三十一日、専門学校を退学する破目に陥り、彼の学生生活は終つた。この頃独歩が屢々訪問して、その説を聴いた人に徳富蘇峯、植村正久、交友に水谷真熊、大久保余所五郎、田村三治、中桐確太郎等があり、愛読書に吉田松陰の「幽室文稿」が

あつた。

学校を退学した彼は、二十四年五月一日、東京を出発し父母の住む山口県熊毛郡麻郷村（をう）に帰つた。第一の日記はこの麻郷での生活記録で終つてゐる。

日記は七月三十一日で筆を止めているが、弟收二の言によれば、この年の夏の末、松下村塾に擬して隣村田布施村で私塾を開き、英語数学を教えて約一年続いたといふ。翌二十五年八月末、弟收二を伴ない再び上京した。そうして翌二十六年二月三日から再び日記を起こした。これが「欺かざるの記」である。

以下この日記から重要な事項だけを抜き書きするが、第一の日記よりも長い期間とわたるから簡単に列記することとした。

二十六年二月 金森通倫の主宰する「自由新聞」に入る。
(二十三歳)

九月 徳富蘇峯、矢野龍溪の幹旋で、大分県佐伯の鶴谷学館の教師として赴任。

二十七年八月 麻郷村に帰省。
(二十四歳)

日清戦争勃発。

九月 弟收二及び鶴谷学館學生と共に上京。收二、十八歳。

(二十八年五月)

十月 國民新聞に入社。
從軍記者として軍艦千代田に乗艦。國民新聞に「愛弟通信」を発表。

退艦帰京。

四月

「國民之友」の編集に従事。

六月

佐々城信子を知る。信子十八歳。

九月

北海道に旅行し、空知川畔に開墾を計

画

十一月

信子と結婚、逗子に住む。

二十九年四月

信子失踪す。

(二十六歳)

五月十日より八月十三日まで日記中断。この間

京都に内村鑑三を訪問。

八月 帰京

九月 渋谷村に居を移す。

三十年一月、二月の記事はあるが、三月の記事なく、四月は二十二、二十三の二日、五月は十三、十八の二日の記事を見るのみ。

四月 日光山照尊院に田山花袋と下宿。「源

をぢ」の原稿を製作。

五月

「源をぢ」の原稿成る。

ここで「欺かざるの記」は終つてゐる。以上が明治二十四年から、三十年までの独歩の身の移り変りのあらましである。

ところで此の二つの日記の間には、約一年半程の中断があるが、その一年半の間は、独歩の精神には大きな変化が認められる。明治二十四年の日記は、独歩の単なる身辺記録に過ぎない。深く自己を諦視しようとする態度は、そこではまだうかがわれないが、「欺かざるの記」では、深く自らの間に沈潜し、自己の煩悶と懷疑、信仰と感動等を凝視しようとしている。

僅か一年半ばかりの間で、どうしてこのような変化を生じたであろうか。このことは「欺かざるの記」その他によれば、独歩がこの間にウォーズワース、カーライル等の著述に接し、多大の感銘を受けて精神的革命をひき起した結果であるという。独歩の小品「小春」に書かれてゐることが確かであるとすれば、彼がウォーズワース詩集を手に入れたのは二十五年九月二十一日のことであつた。カーライルに初めて接したのは何時であつたか正確には知り難いが、親友中桐樞太郎に宛てた二十五年九月二十二日付の書翰には、既にカーライルの言が引用されてゐるから、ウォーズワース詩集以前にカーラ

イルを読んだ筈で、読んだのは、"Hero-Worship"の一部ではあるまいかと臆測せられる。これらイギリスの文学者の著述に接することにより、独歩の精神は多大の影響を受け、「欺かざるの記」の内省的傾向はその結果もたらされたものであると考えられている。

然らば独歩は此らの詩人文人から、どのようなものを得たのであるうか。又彼の文学を生み出す力となつたものは何であつたか。彼の体験したところがいかんか文学作品に昇華したか等のことを「欺かざるの記」によつて考へてみることにした。

二 シンセリティー

「欺かざるの記」は明治二十六年二月三日に起筆された。この頃独歩は自己の人生の指標を文学においたわけではない。政治家たるべきか、或は文学者たるべきかと迷つており、「吾は断然文学を以て世に立たんことを決心せり」とその決意を示したのは、その年の三月二十一日のことである。それ以後、独歩がひたむきに文学の道歩み続けたかというところではない。佐伯在任中には印刷事業に手をつけようとし、佐々城信子との熱烈な恋

愛中、北海道空知川の河畔に開墾事業を計画し、又は文学と伝道の何れを選ぶべきか迷い、後には政治家たらんと計画したことすらあつた。幸か不幸か、それらに進むべき入口は独歩には一度も開かれなかつたけれど、彼の一面でそうした事業への関心のあつたことも見逃せない。こういう企図が、単に貧困から通れ出るためになされたと考えてよいかどうかは疑問である。

さて四年にわたる「欺かざるの記」を吟味すると、特に頻繁に用いられて目立つ言葉がある。曰く「幽音悲調」曰く「シンセリティー」、曰く「自由」、曰く「驚異」等である。そうしてこれらは何れも特殊な意味で用いられている。

これらの中「幽音悲調」「幽音高調」「幽音玄調」「幽音秘調」等と記されている場合もある。は二十六年の記事の中に屢々見受けられ、「シンセリティー」の語は、この日記の至る所に見られるが、特に二十六年六月から九月にかけて頻繁である。

「自由」という言葉が特に目だつたのは、彼が千代田艦に乗る前の二十八年九月及び十月で、「山林の自由」「燈の自由」などと記されている。

又「驚異」というのは、宇宙、自然乃至は人生の不可

思議に対する感情で、「欺かざるの記」には「不思議な宇宙」「不思議な人生」という意味の言葉が至るところに見出される。然し、これは飽くまで単なる感情に過ぎない。宇宙や人生を深く探求し、思索しあぐんで歎息したときの言葉ではない。独歩の素樸な直覺にまつわる一種の情調と言うべきであろう。

この外「人生の経過」、「淳朴の生活」等の語に独歩が深い感慨をこめていることも見逃せない。

これらの言葉の中で最も頻繁に用いられているのが「シンセリテイー」で、

吾にシンセリテイーの感亡びなば死すべし自殺すべし。シンセリテイー亡びて而かも生て我に何等か残る。(26・7・21)

と述べ、又親友中桐確太郎に宛てた手紙の中で「『シンセリテイー』は僕の生命に候」とも言っている。かように独歩の生命とまで言うシンセリテイーとは一体何であろうか。まずこのシンセリテイーを検討することとした。

「シンセリテイー」という語は、二十六年三月三十日の条に始めて見える。独歩はこの言葉をカーライルから学んで得たように記して次の如くに言っている。

カーライルが所謂シンセリテイーなるもの、吾今に

して始めて之を感じ得たりと信ず。カーライルの書に就てシンセリテイーを聞く事已に久し。ひそかに自ら其の意を得たりとなせしなり。シンセリテイーとはわれ之を至誠と訳したり。非なり。

「赤条々の大感情」これぞシンセリテイーの真意なりける。(26・6・20)

「欺かざるの記」について見ると、ここに「赤条々の大感情」という如く、「シンセリテイー」とは、独歩がある状態のもとで体験する特殊な感情内容、特殊な情調をさすのである。人間関係に於ける徳性、乃至は言語や行為の価値としての誠実又は至誠という意味では用いられていない。二十六年六月二十日以後、「欺かざるの記」に於ては、独歩の特殊な感情をさしてシンセリテイーといふのである。

大いにシンセリテイーを説けども、シンセリテイーは不思議なる感情なり。要するに默契神会の外なし、言説すべからず(中略)今自ら以てシンセリテイーとする所の者は爾來数月の煩悶憂苦を経過して一旦忽然として感傷する所あり。茲に初めて其の感情を以てシンセリテイーなる者と自ら認めしなり。(26

この記事でも分るように、実は、独歩は言説しがたい不思議な自己の感情にシンセリテイの語を当てたのであるが、それは一体どのような感情であつたか。

「欺かざるの記」によればシンセリテイの感と見られる記事が処々に見当たる。二十六年八月十四日の条にはシンセリテイと明記した次の記事がある。

十二日の夜、半宵、突然眠りを破れば、火事を報ずる鐘声、四方に聞ゆ、言ふ可からざるシンセリテイの感突如胸を打ちて来る。直ちに吾を此宇宙の間に見出す。時間なく空間なく、凡ての慣習の束縛なし、無限の幽愁泉の如く湧きて到る、吾未だ曾て此大シンセリテイに摸たれたる事なし。

かようにシンセリテイの感は突如として独歩の胸に迫り来る幽愁を帯びた一種の情調であり、この時彼は今まで自分を束縛していた世俗的習慣から急に解き放たれ、恍惚状態の中で宇宙に於ける一個の確かな存在として自己を感得したという。これが彼のいうシンセリテイの感である。この感情をシンセリテイと名付けたのは、前に述べたように、二十六年六月二十日のことである。然しそれ以前にも独歩は同様の情調を幾度か体験している。同年四月七日の

天を仰げば星影茫漠、蒼天に燦たり。幽思冥想、遠く此の世界の外を想ひ、靈を天の一方の明星に映せて、落涙數行禁ずる能はず。

とある記事も、五月九日、英国公使館前の林間を散歩した時の

東天に白雲の高く高く薄く淡く蒼穹を彩るあり、蒼々の天、愈々蒼々たり、吾之れを仰ぎ恍惚とし吾が此の宇宙の中に生れたるを喜び、一種敬虔の念、胸にわき出でたり、吾が生は確かなり、宇宙は実在なり云々

という記事、又五月十二日の「夕暮に独り寂寞の境を漫步して天の蒼々として限りなきを仰ぎ、時の悠々として窮りなきを想ふ時は、人間、心靈の独立を感じ、天地の自由空遠悠々たるに冥合して、又人間社会の醜穢たる見聞を脱離するを感ずる」という記事もやはりシンセリテイの感の体験記録と見るべきであらう。又六月八日、天晴れ星の満ちた夜空の下を漫步し「仰いで宇宙の縹渺、深遠、高壮、美妙なるを感」じたのもこれである。しかしまだその時は、この感情体験を「シンセリテイ」とは呼んでいない。

斯様なシンセリテイの感は、独歩が佐伯に赴任する頃

まで、屢々何かに觸発して彼の胸に迫つてゐる。

昨日「南洋行」を起稿し天を仰いで冥想す。突如として感あり。云々(26・7・4)

見よ、見よ、仰いで天を見よ深き底知れぬ空云々(27・6)

昨夜眠らんと欲する前、飽迄天辺の月明を賞す。ア、かゝる時にこそシンセリテイーは吾に燃ゆれ。(27・27)

滯途月光に對する毎にシンセリテイーの感動く。云々(27・29)

半夜、吾今独り此の室に坐す。四顧入眠りて寂寞たり。窓外を望めば満天の星影燦然として深空にきらめく。云々(28・8)

昨夜、夜更けて沈思冥想一時に及ぶ、満天の星影親しく吾が孤懷を照すあり。「星づく夜」の想像を走らせば、シントライ眞実の感、シントライ転た加はる。(28・17)

夜更けて窓に独り徘徊、仰いで蒼空を望み冥想して云々(29・12)

路上寂寞、黒風後より襲ふ。仰げば星空に満ち云々(29・12)

昨夜われ友と別れ、独り曇りて暗き夜をたどり帰る。

寂寞の感に堪へず、忽然として感あり。云々(29・19)

ここに拾ひ挙げた記録を吟味することによつて、所謂シンセリテイー感の大体を窺うことができる。独歩が突如發作的にこの感情を体験し、この特異な情調にひたるのは殆ど夜、蒼天の下に於てである。それが月明の夜と満天の星のきらめく蒼冥の夜とを問わず、何れも無辺の大空を仰ぐとき、突如としてこのシンセリテイーの感は独歩の胸に湧き上がつて、幽玄の情調がしばし彼をおし包んでしまふ。

而もその時独歩は孤独でなければならぬ。友達と語りつつ夜道を歩いている時は、同じ大空の下でもシンセリテイーは彼に訪れていない。佐伯に赴任の後、独歩は尺間山に登山して、山頂の巖頭に月光を仰いで自然の大觀に接している。然し此の時、彼にシンセリテイーの感はおこらなかつた。それは弟取二と二人であつたからである。この時山の宿で彼等が泊り合わせた異様な二人の女性には「忘れ得ぬ人々」の中シントライに挙げられていない。当然物語の料として忘れ得ぬ人達である筈なのに、独歩から速やかに忘れ去られた理由の一つは、独歩が一人でなかつたからではあるまいか。シンセリテイーは個人感であ

り、社会感はシンセリティーを害する(26・7・20)と述べているのもこのためである。

斯様にシンセリティーの感は孤独の独歩に夜訪れて来る。この時彼は、先ず壮嚴にして無限な宇宙の神秘を直面し、「恍惚とし吾が此の宇宙の中に生れたるを喜び、一種敬虔の念、胸にわき出で」るを覚えるのである。それと同時に、自己を一個の確かなる実在として見出している。この時彼はもはや今までの現実の独歩ではなく、世俗一切の事情と慣性との束縛から解き放たれ、神聖無限の大宇宙の中に呼吸する。或は時の永遠なるを思い、また自己を「神聖無窮の世界に住む神の児」と感ずるのである。

これが独歩のシンセリティーの感であるが、それはあくまで感動であり、一種の情調である。宇宙や人生を深く冥想思索したり、嚴肅に自己を認識しようとする知的反省的態度ではない。独歩をおしつづんでいる特殊な情調の中で、彼の意識が宇宙を神秘と感じ、自己を確かなる実在と感じとつているに過ぎない。この時主体をなすのは、独歩の感性的な意識であつて、知性ではない。だからこの体験に於ては、常に感じ方がままつていて、変化や発展を示していない。それはシンセリティーが感情の

世界に属し、一種の情調に外ならぬからである。従つてそれは単純でもあり、持続性もない。これが感情の通性でもある。彼はこの情調の中で常に宇宙の無窮無辺なることを直覚すると共に、それに包まれた微小な自己を確かな存在として意識する。

「己を神聖なる天地に見出す」と言い、「直ちに己を大自然無窮の呼吸中に見出す」と述べている如く、彼は大きなものの中に於ける小さな人間として、自己を感じ得ている。大自然は、人間を包むものとしての大自然であり、宇宙も、人間を包むものとしての神聖にして神秘なる宇宙である。そういう宇宙自然と自己とを別個に感じてはいない。小さい人間を包む大きな宇宙、大きなものに包まれてゐる小さな人間として感得する。これがシンセリティーの感に於ける独歩の直覚の仕方である。かようなシンセリティーの感の中でこそ始めて宇宙の神性なるミステリーに触れ、大自然の美妙をも感ずることが出来る。シンセリティーの人のこそ真の詩人であり、真の哲人であつて、「シンセリティーの感情死して、凡ての意味深き詩人哲人の言悉く其の生命を失ふ。」(26・7・21)「さればシンセリティーの感こそ、真に生きる人間の本质ともいふべく、シンセリティーの泉を汲まず

しては詩も信仰もありえないと言う。

シンセリティーは斯様に発作的に觸発して、しばし独歩の精神を領し、やがて潮のひく如く去つて行く。独歩は屢々これを体験しているが、それは常に偶発的であつて、随意にこの感を得ようとしても、それは不可能である。従つて「欺かざるの記」には、時折シンセリティーになり得ないことを嘆いている。

以上のように独歩の所謂シンセリティーの感を検討して来ると、北村透谷が「内部生命論」(26・5)で述べた言葉に思い当たる。透谷は「内部生命論」の終に、文芸上の写实派と理想派を區別し、「理想家が暫らく人生と人生の事實的顯象を離れて」、何物かに瞬時冥契するインスピレーションを読み、眞正の理想家とは、このインスパイアドされた詩人の外にないと言張し、更にインスピレーションを説いて次の如く述べている。

畢竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるなり。(中略)

この感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者なり。この感応によりて瞬時の間、人間の眼光

はセンシユアル・ワールドを離るゝなり。

これが透谷のインスピレーションの説である。もとよりインスピレーションを論じた者は、独り透谷にとどまらぬ。既に早く徳富蘇峯は「国民之友」二十二号(21・5)に「インスピレーション」と題し、「蓋し『インスピレーション』は神力なり」と言い、これによつて始めて人間は人間より超越し、吾れが、我より超越することができると述べた。然しそれが何によつて忽然として起こるか捕捉しがたい。ただ若しこのインスピレーションを得んとすれば、それはただ醇粹(Genuineness)であることを措いて外にないと言っている。ただしその用例はやや卑俗であつた。又「六合雜誌」百三号(22・7)には、小崎弘道が同志社で行つた講演を掲げて「聖誓のインスピレーション」と題している。その中で小崎弘道はインスピレーションを「神の靈の感化」とし、聖書を編纂した者は、必ずや「神の靈の感化」に浴し、神の導きに依つて筆記した筈だと述べている。更に「真理」の三号(22・12)でも Prof. Otto Boldt (Bilderer) が同じく聖誓にまつるインスピレーションの問題をとり上げ、多方面から詳しく論じている。

更に森鷗外も没理想の論争で「早稲田文学の没理想」

(24・12) 柵草紙(二七号)を草し、 Edward von

Hartmann に学んだ先天的理想を提唱し、芸術制作上の「神来」^{ハルツグマ}と言及した。そうして、インスピラチオンは芸術家の意識とおのずから生ずるものではなく、「太虚」^{タキウ}の無意識から先天の理想が芸術家に働きかけた結果に外ならぬと主張している。

此等の論議の中で、透谷の説は鷗外のそれに近く、この不可思議な心理現象を一つの解釈を与えようとしたものである。

このインスピレーションの体験をつぶさに記したのが、独歩のシンセリテイの感であり、シンセリテイとは独歩のインスピレーションに外ならぬ。

のちに綱島梁川が「予が見神の実験」(38・5)の中で報告している見神の体験も、やはり一種のインスピレーションであった。梁川は明治三十七年の夏から、三回の体験を得ている。その最初は夜、病床の上で於てであった。

四壁沈々、澄み微りたる星夜の空の如く、わが心一念の翳を著けず、訝えこ訝えたり。爾時、^{その}優に靡るなる、謂はば、滯依の酔ひ心地ともいふべき^{悦喜ひ}。そかに心の奥に溢れ出でて、やがて徐ろに全意識を

領したり。この玲瓏として充塞せる一種の意識、この現世の歡喜と倫を絶したる静かに淋しく而かも孤独ならざる無類の歡喜は凡そ十五分時がほども打続きたりと思ほしきころほのかに消えたり。

これが梁川の見神の体験である。この報告で分る通り、それは何故とも知れず忽焉として梁川の意識に湧き上がる一種の発作的情調であり、法悦ともいふべき恍惚の境地であつた。そうして此の状態は数分乃至十数分しか持続していない。これを梁川は見神の実験としたが、このインスピレーションに比すべき情調を、独歩はシンセリテイの感と名付けたのである。

三「自由」と「驚異」

二十六年八月四日の条に、「人間は其の外内に『シンセリテイ』の敵を有す。内なるは則ち己れの慣性なり。」とある。これと同様な慣性を惡み呪う言葉が「欺かざるの記」には至る所で見られる。「習慣狎熟の空漠たる感情思想」(26・4・4)と言ひ、「情習の妖魔靈を喰ふ」(26・4・19)と言ひ、「習慣性を心頭よりやきつくす覚悟あるべし」(26・6・20)と言つてゐる。

独歩の悪んだ慣性というのは世俗社会における惰性的生活感情である。「行掛りと境遇と場合と、虚想と習慣との雲霧の中を遊び居る心地」である。独歩はそれを「社会感」とも呼んでいるが、そういう生活感情に狎れて生きている限り、形式と皮相と妄執との齟齬遍々たる世界を脱することは出来ない。ましてやシンセリテイーの感に入り宇宙の神性に触れ、或は不思議な人生の存在を直覚するなどということは思いも及ばぬことである。現実の社会生活に狎れて、惰性的に生きておれば、シンセリテイーの世界のあることにすら気付かないであらう。習慣的な環境や職業や世俗的欲望や皮相的妄執が、人間の魂を束縛して、シンセリテイーの感に近づかしめない。

彼が「束縛」というのは人間の魂に対する習慣狎熟の束縛であり、「自由」というのはそういう束縛を脱して、シンセリテイーの感に入ることを目指すのである。独歩は日記の中で神に祈っている。「神よ、願はくば我を『形』より救ひ給へ、形の束縛より救ひ給へ、皮相より救ひ給へ、世で生きて世に慣るゝ謬より救ひ給へ。」(26) 8・3)と。

習慣的な生活感情を棄て、形骸的束縛をすら脱して真の自由となるのは、シンセリテイーの感に入りシンセ

リテイーの人となるより外にない。かくて魂の自由と独立が回復された時、始めて宇宙や自然の神秘をみちた真の姿を、又不思議な人生の真実を感得することができる。「欺かざるの記」にしばしば見られる「自由」の概念は以上のような内容をもつていて、シンセリテイーの感と切り離して考えることはできない。「山林の自由」というのは、大自然に於ける魂の解放、大自然の中に於けるシンセリテイーの可能性を証つた言葉と見て誤りはないであらう。

さて、独歩はシンセリテイーの感に悟入して以来、屢々宇宙や人生に驚異の情を示している。「宇宙は不思議なり」「人生は不思議なり」という歎声が日記の所々できかれる。

人生真に不可思議に堪へず思ふ愈々不可思議に堪へず。(26・7・28)

独歩はかように宇宙の不思議さ、人生の不思議さを繰返し述懐している。しかしその不思議さをつきつめて解明しようとするのではなかつた。このことは後の「岡本の手帳」(39・6)にも書いている。

希くは吾がにぶりたる此心めざめよ。此世の夢よ、さめよ。わが願は宇宙の不思議を明にせんことに非

ず・人生の秘密を明白に解剖せんことに非ず。

たゞめざめんことなり。「秘密」に戦慄せんことなり。

「不思議」に驚魂悸慄せんことなり。

「めざめる」とは「習慣の昏睡」より醒めることであり、惰性的な生活感情を脱することである。習慣的な皮相の眼を以てしては、この不思議を不思議と感ずることはできない。それでは習慣の眠りより醒めるのはどういふ契機が必要であるか、それはシンセリティーの感に入ること以外に途はない筈である。かのインスピレーションに打たれた時、独歩は習慣を離れ事情を脱し時代をも忘れて一種の情調にひたつたことが「欺かざるの記」には幾度となく見出されるではないか。

宇宙や人生を不思議なりと感ずる情を、独歩は「驚異」とも呼んでいる。「牛肉と馬鈴薯」(34・11)「岡本の手帳」で、彼は不思議な宇宙に驚きたいと言ひ、「独歩吟」の中でもその気持を歌つて「驚異」と題した。

ゆめを見る／＼はかなくも

なほ驚かぬ此ころ

吹けや北風此ゆめを

うてやいかづち此ころ

をどろき立ちてあめつちの

くすしき様をそのまゝに

驚きさめて見む時よ

其時あれともがくなり

この夢から醒めるといふのは、何事も言うように、惰性的な生活感情や習慣から解脱して、魂の眼を見開くことである。めざめた心眼を以て、不思議な宇宙の真実を見ようとするのである。然しいかにもがいても、それを意のままに体験することはできない。夢から醒めるのはシンセリティーの感によらねばならぬからである。

斯様に考えると「不思議」といふ「驚異」というも、さきの「自由」と共にシンセリティーの一面であつた。

四 独歩とイギリス浪漫派との関係

さて、このシンセリティーを独歩はカーライルから学んだ如く記している。又一般にそう考へているむきも少なくないようである。なるほど「シンセリティー」の語はカーライルから得たものである。然しその内容である直覚の仕方、感動の仕方をカーライルから学んだとは考へられない。

「欺かざるの記」から、前にも引いた如く、シンセリ

テイーは不思議な感情で説明し難く、畢竟、黙契神会する外はないと言ひ、又「シンセリテイーの感は直覚なり。直覚は教ふ可からず」(26・2・6)とも述べている。

シンセリテイーが説明し難い感情で、教えることもできない直覚であるならば、これをカーライルから学びとることも困難だつた筈である。事実カーライルは——

「Sincerity」を独歩の体験したようなインスピレーションとして説いている場合は一度もない。又いか言葉の力をかりたとしても、感情内容殊にインスピレーションの方法などをそのまま人に伝えることも或は他から学ぶことも、原則的に不可能である。

されば独歩の所謂シンセリテイーは、彼独自の感情体験でカーライルからかりてきた語を当てたものと見なければならぬ。

このように内容を十分咀嚼しないで、外国語を彼独自の解釈で受けとめている場合が他にもある。「欺かざるの記」の始めの方に「幽音悲調」という語が所々に見られる。これは「人性自然の幽音悲調」とか「人情の幽音悲調」と用いられている。思うにこれはウオーズウォー

スの「Tintern Abbey」の一句「The still, sad music of humanity」の訳語である。

吾れ詩人の自分を考ふるに、此の人間の人性が人間胸臆の深底に於て発する幽音悲調を聞て之れを説明し、之れを教ゆるに在り、則ち此の幽音悲調はクリストよりも、孔子よりも、ウオルズウォールスよりも、(略)又た自らの靈よりも聞くを得べし、聞て而し之れを発揮する所以は則ち以て人間を教ゆる所以也。

(26・3・31)

と述べているが、この幽音悲調を聞くとは一体どういう意味であるのか明白でない。他に「生死に対するヒューマニテイの声」「栄枯盛衰に対するヒューマニテイの声」「天地悠悠々宇宙茫茫々に対するヒューマニテイの声」などという言葉もある。これらは自然や人生に対する感慨もしくは詠歎の意味のようにも受けとれるが、果してそれが「The still, sad music of humanity」に通ずるかどうか甚だ疑わしい。これもやはり独歩が我流の解釈でうけとめた一例であろう。

「吾が感情の(思想を言はず)大にウオーズウォールスに似たるを覚ゆ」(26・4・12)と言ひ、又

ウオルズウォールスの詩想と、吾が時々胸を衝きし感情と全く同一の形を有する者あり、さり乍ら其の性質に於ては多少異なるを見る、其の差異は如何。

とも述べている。これらの記事から考えると、独歩がウオーズウオーズの詩に強い共鳴を感じたことは確かであるが、自然や人生の見方感じ方を彼から学んだというよりは、独歩には独歩固有の見方感じ方があって、それに相通するものをウオーズウオーズの中に見出したと考えるべきであろう。独歩は自身の感受性をカーライル等の思想で確かめると共にウオーズウオーズによつて自らの詩想を養つていつたと考えた方がよいようである。

ところで、独歩がまだカーライルとウオーズウオーズも読んでいない明治二十四年、東京専門学校を退学して、一時郷里の麻郷村に帰省した。五月一日離京し、三日に神戸を出帆して、瀬戸内海を船で旅した時の一経験を、次のように第一の日記に記している。

この際余の感情を痛く刺撃したるは、寂寞たる小島の海岸にひとり人間あり、定めて彼しこの山かけに見る茅屋の主人なるべし、黙々として何かあざり居たり。余が眼裏、彼を映したる一刹那、嗚呼かくしても一生涯は一生涯なりとの感、熱涙と共に突き起る。而も顧みて吾を思ひ、吾及び多くの人々も亦密に考究し来れば、或る無形の小島に碌々生涯を送

る者なる事を感じ、人間は小なる者哉と思ひたり。

これは小さな一体験ではあるけれど見過ごすことのできない記録である。独歩が見たのは瀬戸内海の自然の中に入りこめく小さな人間の姿である。この情景に接するや、彼はこの漁夫のわびしい生活を思い、その生涯を思つていたく感動し、人間の小さいことを直覚している。この感情は極く素樸で単純な詠歎に過ぎないが、実はこれが独歩本来の感受性の傾向なのである。そうしてこの感傷が後のシンセリティーの感につながるものであつた。

素樸な感情ではあるが、この感じ方の中に既に後の独歩の人間把握の仕方が胚胎している。彼はまず小さな人間の姿を、大きな瀬戸内海の自然の中に捉えている。大きなもの、無限なものの中の小さい存在、永遠に於る短い生命、大きな運命に奔弄せられる小さな人生、このように大きなものの中の小さいものとして人間を捉えるのは、後のシンセリティーの感に於て、又その他の場合に於て常に見られるところで、謂わばこれは独歩の直観方式である。

更に、独歩は海辺の漁夫の生活と生涯とに同情の涙を流し、「嗚呼かくしても一生涯は一生涯なり」と感慨を洩らしている。

ところで「欺かざるの記」に彼は「淳朴の生活」^{シュンポクノセイゴ}という言葉を用い、それに深い意味を籠めてゐる。

「淳朴の生活」之れ今日初めて明白に其の中を含める真理を悟りぬ。(26・8・27)

「淳朴の生活」の詩的真理に付愈々思ふ者あり。(28・30)

等と述べてゐる。独歩がこの「淳朴の生活」に對して深い關心をもつに至つたのはウオーズウオースの詩によつて示唆されたと考えらるべきもある。それは二十六年八月二十五日の記事に次のような文章があるからであらう。

ウオーズウオース詩中のミカエルを想ひ、其のシムブルなる、其のインノーセントなる生活を想ふ時は熱涙止めんと欲して止む可からず。

然し、まだウオーズウオースを読んでいない頃の瀬戸内海での体験で、既に「淳朴の生活」そのものとも言うべき漁夫の姿に同情の涙さえ流してゐるのである。而もその後「忘れ得ぬ人々」を草したときは、この海辺の漁夫がまず第一に挙げられて、鮮明に描写されてゐる。

名も知らぬ小島の海辺に蠶めくこの漁夫が、いつまでも忘れ得なかつたのは何故であらうか。思うにその理由の一つは、その人物の「淳朴の生活」にあつた筈である。

ウオーズウオースからマイケル(Michael)を学ぶより前に、既に独歩には所謂「淳朴の生活」に對する感受性があつた。而もその「淳朴の生活」者の背景に大きな自然があつたとき、その姿は独歩の脳裏に一層感銘深く刻みこまれて、忘れ難い人となるのである。「病牀録」(41・7)中の「不思議なる大自然」の中に書かれてゐる詩材としての人物は次の五人であつた。

芳島と女島との間の渡守

女島にて見たる水門を下せし若者

(日記には「若者」でなく、「童子」とある。)

船頭町より木立村の間を渡す舟子

十二段(山名)の山腹にて逢ひし老樵夫

乞食紀州

これらはすべて、独歩が鶴谷学館の教師として佐伯滞在中に見た人物ばかりで、「欺かざるの記」にみな書留められてゐる。これらの人々も独歩には忘れ得ぬ人達であるが、それをウオーズウオースの影響に基づくかの如くに述べてゐる。果してそうであらうか。彼等の背後には、記録にこそないが、海か山の大きな自然があることに気がつくであらう。

斯様に自然の中にあびしく「淳朴の生活」を送る人達、

こういう種類の人物に深い感銘を覚え、いつまでも記憶にとどめる、それが独歩本来の感受性の傾向なのである。

又彼は瀬戸内海での小体験の中で、人間の生涯について詠歎を洩らしている。人間の生涯が、いかに独歩にも思わせているかは「欺かざるの記」を見れば、自ら明らかになるであろう。日記では「人生の経過」という言葉を繰返し用いている。永遠の「時」は無限の宇宙と共に、独歩に無量の想いをいだかせる。そうして常にセンチテイーの感に入る契機ともなつていた。もう一度、彼がセンチテイーの感に打たれた時の記録を挙げて見よう。

夕暮に独り寂寞の境を漫步して天の蒼々として限りなきを仰ぎ、時の悠々として窮りなきを想ふ時は、人間、心靈の独立を感じ、天地の自由空遠悠々たるに冥合して、又た人間社会の離脱たる見聞を脱離するを感じるなり。(26・5・12)

悠々として窮まることのない「時」は、独歩に素樸な感傷を与え、それに対する詠歎は「欺かざるの記」の至る所に見られる。

而もこの永遠の「時」は、短い人間の生命との対比の上で意識せられる。そうして「無窮の自然を思ひ較べて

短生の人命を思ふ時は戦慄に堪へず、憂愁に堪へざる也。」

(26・9・11)と述べているように、独歩を戦慄せしめ幽愁の感にひたらせるのは、寧ろ人間生命の短かさである。自然の無窮、「時」の永遠を思えば思うほど、また人生の短かさを思えば思うほど、人間の生涯の意味は重大になつて来る。そうして、その背後にある運命の力をさえ感ぜしめる。彼が「人生の経過」という言葉に感慨をこめ、繰返し強調したのはこの故である。

船頭町から木立村に渡す舟子の身の上話に対し、「其述懐は人をして人生の経過を思はしむ、吾此老人を忘るゝ能はず」(26・11・7)と記し、後の「不思議なる大自然」の中に詩材の人物として挙げることを忘れなかつた。

「人生の経過、時間の残酷、人間の老衰を今更らの如く感じぬ」という感想も、亦いくたびとなく墓地に累々たる墳墓に対し、熱い涙を流したのも同じ感情に基づくものである。

独歩が佐伯赴任以後、詩材又は物語の料として日記に記した草刈乙女、畔を行く夫妻の農夫、渡守、老樵夫、街頭に琵琶を弾じて老をやる男、鶴谷学館の大工の老夫婦、何れも淳朴の生活を送る者か、人生の経過を思わし

める者ばかりであつた。

然し、既てさきの瀬戸内海での小体験では、かの海辺の漁夫の生活と生涯で、深い感慨が示されているではないか。

二十六年四月二十四日の条で

吾の経過を知り、人生の経過を思ひ喟然たらざるを得ざりき。

嗚呼『人生の経過』吾実に「五年は経過せり」のウオルズウオースを吟じたり。而して自ら省みて、幽愁に堪へぬ者あり。

註” Five Years have Past; five

summers, with the length”

1 Intern Acoeyーの第一句

とある記事によつて、人生の経過の意味をこのイギリスの詩人から学んだと考へるのは早計である。かの瀬戸内海での小体験に於ける感受性がシンセリティーの感で、淳朴の生活への関心で、人生の経過に対する詠歎に、分科し、生長したのだと考へるのは誤りであろうか。

五 結 び

独歩の二つの日記から、私は以上のように考へて来た。ここで、独歩のシンセリティーと、わびしい人間の姿を深くながく印象に残して忘れ得なかつた彼の感受性とを比較してみる必要がある。

シンセリティーの感は、夜の大空の下で、突然独歩に訪れて来る哀愁を帯びた感情であつた。その時彼は、しばしの間この世の習慣の束縛から脱して、天地の神秘に冥合し、時の永遠なるを感じ、宇宙の無限なるを思うと共に、微々たる小さな自己を、確かに生きている存在として感じ取つている。

これに対して、彼が佐伯で詩材又は物語の料として捉えた人物は、いずれもささやかにわびしく淳朴の生活を送る者か、或は過去の生活の歴史、人生の経過を想出しめる者であつた。此等の人々の後には大自然の背景があるか、或は全てのを流し去る偉大な時の力か、人間を弄ぶ大きな運命の手があつた。斯様に、大きなものの中にある小さな人間に、独歩は限りない同情の涙を流し、深く心摸たれるのである。そうして、こういう感動は夜ではなく、寧ろ昼の明るさの中で多く経験されている。

即ち、シンセリティーの感にあつては、しばし現実から脱して、大いなるものの中で小さな自己を見出すので

あるが、これに對し、現実の世界で、大きなものの中にある小さなわびしい人間を見出だした時、独歩は深い感慨をもつて印象にとどめ、いつまでも忘れ得ないのである。

斯様に考えると、前のシンセリティーと後の独歩の感受性とは、全く裏はらの關係にあることとなる。つまり独歩の感受性を裏返しにすれば、それはシンセリティーの感になるのである。この感情は共に、大きなものと小さなものが、包むものと包まれるものとして、同時に捉えられたときに働く。これが独歩本来の感じ方なのであつて、あながち、イギリス浪漫派の人達から学んだとは言いきれない。

それでは一体独歩は、この自然や人間の捉え方を何から学んだであろうか。私は彼を教えはぐくんだのは、キリスト教プロテスタンチズムであると言いたい。常に宇宙と神と人間との關係を説くのはキリスト教であつた。儒教も天を説いているが、新しい教育を受けたクリスチャン独歩に、宇宙と神と人間とを想わしめた素因の第一に挙るべきはキリスト教であろう。

固より、イギリスの詩人や文人から、何も学ばなかつたというのではない。シンセリティーの語は、確かにカー

ライルから借りたものであつた。殊に「欺かざるの記」に見られる内省的傾向は、彼等を学ぶことによつて得たものの中で、最も貴重なものと言わねばなるまい。

ところで、独歩の文学を生みだす力となつたのは何か。勿論それは一言にして言えば、前に述べた彼の感情である。彼の詩はもとより、その小説が抒情的傾向をもつのはそのためである。シンセリティーの感によつて得られるものは抽象的な感想に過ぎない。だから「牛肉と馬鈴薯」や「岡本の手帳」というようなものになつてしまふ。このことについては改めて述べる。然しシンセリティーとは裏はらになる独歩の感受性によつて捉えられた人物は、彼の小説の中で、哀愁を湛えて生きている。このことについては次の稿で述べることにする。

(此稿 終)

この小論を作製するに当り、坂本浩氏の「国木田独歩」の年譜、昭和女子大学編「近代文学研究叢書」九巻中、独歩の「生涯」の部を参照させて頂いた。両著者に深く感謝する。